

原町市埋蔵文化財調査報告書第17集

# 原町市内遺跡発掘調査報告書 3

平成9年度試掘調査

桜井古墳群

広畑遺跡（第2次調査）

泉廃寺跡（第6次調査）

桜井原畑遺跡

谷中遺跡

1998年3月

福島県原町市教育委員会



# 序

文化財は、わが国の長い歴史のなかで生まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができなかった先人の生活の様子や文字がまだなかった時代の人々の生活や文化について私たちに多くの情報を与えてくれます。

近年、原町市内では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつあります。その一方、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では埋蔵文化財の保護のため、開発が行なわれる前に、遺跡の範囲や性格などの資料を得る目的で分布調査や試掘調査を実施しております。

開発に際しては、これらの資料をもとに、関係の方々及び機関と遺跡の保存協議を行ない、保存が困難な場合については、図面や写真などによる記録保存のための発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成9年度に実施した市内遺跡発掘調査事業の試掘調査の成果報告書です。今後この報告書を埋蔵文化財の保護、地域史の研究のために活用していただければ幸いに存じます。

最後に、地権者の皆様をはじめ調査に御協力いただきました方々に心から感謝いたします。

平成10年3月

原町市教育委員会  
教育長

千葉良則





## 例 言

1. 本報告書は、平成9年度に実施した原町市内遺跡の試掘調査報告書である。
2. 調査は、国及び県の補助金の交付を得て原町市教育委員会が実施した。
3. 本報告書の執筆及び編集は、原町市教育委員会生涯学習部文化課 鈴木文雄、堀 耕平、  
荒 淑人が行なった。
4. 試掘調査、報告書作成にあたり、次の機関および個人から指導助言を得ている。  
文化庁記念物課、福島県教育庁文化課、大塚初重、玉川一郎、松田隆嗣、大和田幾雄
5. 調査で得られた資料は、原町市教育委員会が保管している。



# 目 次

序  
例 言  
目 次

第1章 原町市をとりまく環境	-----	1
第1節 地理的環境	-----	1
第2節 歴史的環境	-----	3
第2章 調査遺跡	-----	8
第3章 試掘調査及び調査成果	-----	9
第1節 桜井古墳群	-----	9
第2節 広畑遺跡（第2次調査）	-----	15
第3節 泉麿寺跡（第6次調査）	-----	20
第4節 桜井原畑遺跡	-----	25
第5節 谷中遺跡	-----	28

報告書抄録



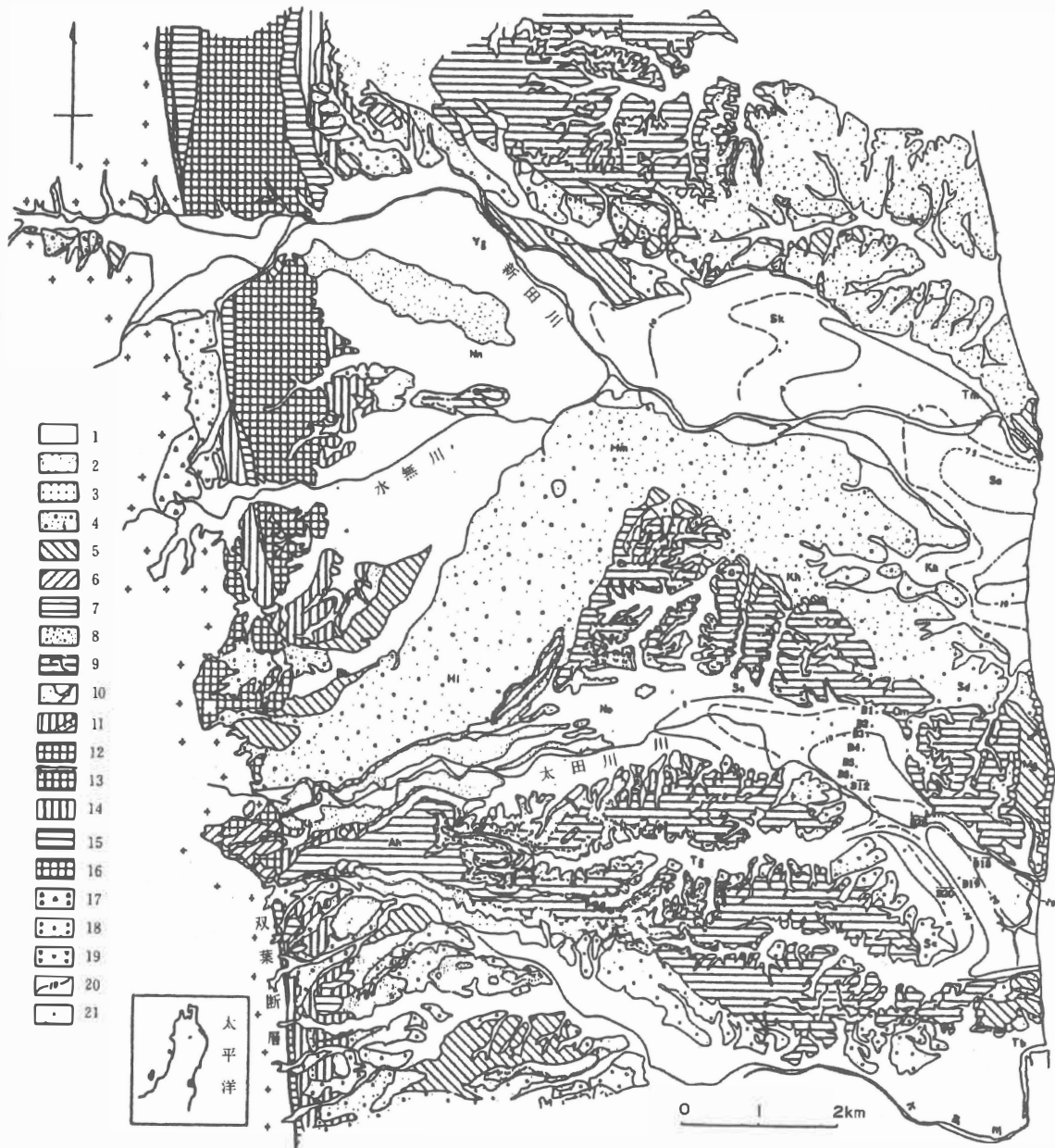
# 第1章 原町市をとりまく環境

## 第1節 地理的環境

福島県原町市は、浜通り地方のいわゆる阿武隈高地東縁部東部の低地帯北方、相馬地方のほぼ中央に位置しており、東は太平洋に面し、行政境としては北は相馬郡鹿島町、南は小高町、西は飯館村・双葉郡浪江町と境界を接している。人口は約49,800人、面積は約199,66km<sup>2</sup>で、当地方の産業及び政治面での中核都市となっている。主要交通網は南北方向に縦走するJR常磐線と国道6号線であり、仙台方面や市内などへの通勤・通学手段として利用されている。

原町市の地形は、西部域を南北方向に縦走する阿武隈高地、そこから派生する相双丘陵・常磐丘陵と称される標高100m以下の低丘陵、及び丘陵間に開析された沖積平野とで構成されている。全体として阿武隈高地にかかる西側が高く、東部にいくにつれて標高を下げている。阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯とは双葉断層（岩沼一久之浜構造線）によって地質的に明瞭に区分され、低地帯もまた断層以東の相双丘陵地域と以南の常磐丘陵地域とに区分されている。阿武隈高地は東西約50km・南北約200kmの規模を有し、古生代から新生代中頃の第三紀中生代に至る地質を有し、北上高地と並ぶ日本最古の地質構造を形成している。基盤層は古生代末期のアパラキア褶曲と中生代末期のララマイド褶曲に代表される二度に渡る世界的な造山運動の際に、古生層及び中生層に貫入した古期及び新期・最新期の花崗岩、変成岩類である。地形的には山頂がなだらかな隆起準平原を呈しており、原町市付近の標高は500～650m前後になっている。

阿武隈高地裾部から東に派生している低丘陵は、新生代第三紀に形成された固結度の低い凝灰岩質砂岩で構成されており、双葉断層により、上層部の相双丘陵（滝の口層）と中・下層の常磐丘陵地域とに区分されている。高地周辺では標高100～150m前後を測り、東延するにしたがって徐々に高度を下げ、海岸部では20～30mを測る。第四紀洪積世における氷河期と間氷期の海水準変動により、丘陵上には海成及び河成の段丘が構成され、高位より順に第1段丘、第2段丘、と命名されている。原町市内では埋没段丘を含む7段丘の存在が知られており、特に第1段丘である畦原段丘と第4段丘である雲雀ヶ原扇状地が発達しているが、他は河川上流域沿いに小規模に分布する在り方を呈している。低丘陵の間には、各河川が樹枝状に開析した谷間に土壌が埋没した沖積平野が入り込んでいる。標高は20m以下であり、縄文時代前期を中心とする海進期には海岸部の大部分が海水面下にあったと考えられており、大木2a式期の遺跡である萱浜の赤沼遺跡の調査では、海水面を標高6m前後に求めている。現在では圃場整備が進み、一面の美田地帯が形成されている。



1: "沖積層", 2: 第6段丘構成層, 3: 第5段丘構成層, 4: 第4段丘構成層, 5: 第3段丘構成層, 6: 第2段丘構成層, 7: 第1段丘構成層, 8~11: 竜の口層, 8: 同c層(砂岩), 9: 同c層(シルト岩・京塚沢凝灰岩), 10: 同b層, 11: 同a層, 12~19: 基盤岩類, 12: 塩手層, 13: 小山田層, 14: 富沢層, 15: 中の沢層, 16: 栃窪層, 17: 古生層, 18: 花崗岩類, 19: 脈岩, 20: 竜の口層上面標高(m), 21: ボーリング地点と孔番, Ah: 畦原, Bb: 馬場, Hi: 雲雀ヶ原, Hm: 原町市街, Ht: 東高松, Ka: 菅浜, Kh: 北原, Kk: 片倉, Mg: 間形沢, Mm: 米々沢, Nn: 長野, No: 中太田, Om: 大甕, Sd: 雫, Se: 下江井, Sk: 下北高平, So: 下太田, Ss: 下波佐, Tb: 塚原, Tg: 鶴谷, Tm: 館前, Yg: 横上

図1 原町地域の地質図 (原図 1979 中川他)

## 第2節 歴史的環境

最近の原町市では、火力発電所建設や県営ほ場整備事業などの大規模開発が推進されており、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査により、従来不明であった弥生時代の遺跡の在り方や、浜通り低地帯における律令期の政治動向を究明する一端となるような多大な成果が続々と報告されてきている。原町市では、これまでも分布調査や発掘調査を通じて遺跡の保存・活用に努めてきたが、今後増加の一途をたどるこれらの遺跡に対して、尚一層の保存・活用の努力が求められているところである。

また、平成7年（1995）には国指定重要無形民俗文化財「相馬野馬追」の繰り広げられる野馬追祭場地の東隣に「野馬追の里歴史民俗資料館」が建設され、当地方の歴史・民俗における生涯・社会教育の場として、その活動が期待されている。

原町市における旧石器時代の遺跡は現在のところ、遺物の出土する散布地が9ヶ所知られている。立地条件を概観すると畦原A遺跡(1)、熊下遺跡(2)、袖原A遺跡(3)などは太田川流域の第1段丘面の畦原段丘上に所在し、陣ヶ崎A遺跡(4)、南町遺跡(5)、橋本町A遺跡(6)、桜井遺跡(7)などは第4段丘面の雲雀ヶ原扇状地に所在している。

縄文時代の遺跡は、早期末から前期初頭の住居跡の調査が行なわれた片倉の八重米坂A遺跡(8)、隣接する羽山B遺跡(9)などが阿武隈高地裾部に所在している(註1)。太田川を北に臨む第1段丘面に所在する片倉の畦原F遺跡(10)の調査(註2)では早期末から前期前葉の土坑3基が調査されている。この時期は、高地寄りに立地する遺跡がある一方で海浜側の微高地に所在する遺跡も知られている。前期初頭大木2a式の土器片が出土した萱浜の赤沼遺跡(11)(註3)や前期前半の土器片が多量に発見された雫の犬這遺跡(12)は雲雀ヶ原扇状地の先端部の微高地上に所在しており、該期の古環境を知る上での貴重な成果を上げている。

中期の遺跡は、大木9～10式の土器片を多量に出土する押釜の前田遺跡(13)が阿武隈高地裾部の低位丘陵に立地しており、新田川流域の第3段丘面上に所在する上北高平の高松遺跡(14)周辺から西側の平坦面一帯は、末葉の大木8a～10式土器片を出土することで知られている。高松遺跡の東方約1km、同段丘面上に立地する植松A遺跡(15)では、昭和52年(1977)の宅地造成に伴う発掘調査により、大木10式期の複式炉を伴う竪穴住居跡1棟が市内で初めて調査されている。

後期から晩期の遺跡は、大洞C1～A式期土器片を出土した片倉の羽山遺跡(16)などの遺跡が市内各地に所在している。平成8年(1996)の宅地造成に伴う高見町A遺跡(17)の発掘調査では晩期中葉の埋設土器を伴う石田炉の竪穴住居跡1軒が調査されている(註4)。浜通り低地帯の海岸部には多くの貝塚が所在しているが、原町市では全く確認されておらず、現在まで空白地帯となっているが、今後発見される可能性を秘めている。

弥生時代の遺跡は、東北地方南部の標式土器として使用されてきた中期末葉の桜井式土器を出土する桜井遺跡(7)(註5)が知られていたが、最近の調査では、海岸部の丘陵の尾根部に

小規模な集落を構成していた例や海浜寄りの低位丘陵中から土器や石庖丁が出土する例が報告されている。また、平成5年(1993)に調査された高見町A遺跡(17)からは弥生時代の後期に位置付けられる十王台式土器を出土し、その北限となる竪穴住居跡が2棟発見されている(註6)。平成8年(1996)に高平地区は場整備事業に伴う法幢寺跡(18)からは桜井式期の土器棺が1基調査されている。

古墳は、前方後方墳として東北第4位の規模を誇る国指定史跡の桜井古墳(19)が新田川南岸の河岸段丘上に所在しており、周辺の古墳と共に桜井古墳群上渋佐支群(20)を構成している。桜井古墳は昭和58年(1983)に範囲確認調査(註7)が行なわれており、軸長約72mの墳丘部に、幅約11~20mの周溝が巡っていたことが確認されている。平成8年(1996)の高平地区は場整備事業に伴う相馬胤平居館跡(21)の調査では方形周溝墓2基が発見されている。

他に昭和42年(1967)に、中太田所在の墳丘部軸長約40mの前方後円墳と推定される与太郎内1号墳(22)、高見町1丁目所在の墳丘部直径約12mの円墳である高見町1号墳(23)の発掘調査が行なわれ、高見町1号墳からは粘土施設を伴う割竹形木棺の痕跡が確認されている(註8)。

平成5年(1993)の高見町A遺跡の調査では、既に削平されてマウンドや埋葬施設は未発見であったが、外郭直径約15m、幅約2mの円形の周溝1基が発見され、高見町2号墳と命名されている。この調査では塩釜式期の竪穴住居跡2棟が市内では初めて発見(註6)されており、この地域が弥生時代から古墳時代への変遷や古墳の出現過程について極めて重要であることを示している。高見町A遺跡は同時に桜井古墳群高見町支群(17)としても重要な地域で、平成7年には市道予定区域とその西側の部分について発掘・試掘調査が実施され、古墳8基、周溝を伴わない刳抜石棺3基、箱式石棺1基の他、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡21棟が確認されており、同古墳群の密度の高さをあらためて示している。

また、平成8年(1996)には荷渡古墳群(24)の3基の山上墳が調査され、いずれの主体部も割竹形木棺の直葬であった(註4)。この他、市内各地の丘陵上に古墳が築かれており、北泉の地蔵堂古墳群(25)、江井の西谷地古墳群(26)、鶴谷の五治郎内古墳群(27)などが所在している。

後期になると、当地方でも横穴が多く作られている。現在確認されている分布状況を見ると、鹿島町との境に近い新田川北部の上北高平には北沢横穴群(28)、京塚沢横穴群(29)、新山前横穴群(30)、北泉に大磯横穴群(31)、地蔵堂横穴群(32)、太田川北部の上太田には道内迫横穴群(33)、大甕には西迫東迫横穴群(34)、雫には坂下横穴群(35)、太田川南部の高には、昭和40年(1965)に調査された高林横穴群(36)(註9)などが河川流域の沖積平野を望む丘陵に所在しており、古墳の分布の在り方とほぼ合致している。また、中太田の中畑横穴群(37)、羽山横穴群(38)、上太田の新橋横穴群(39)は、雲雀ヶ原扇状地を望む丘陵に所在している。この内、昭和48年(1973)に発掘調査が行なわれた国指定史跡の羽山横穴(40)は、玄室奥壁に壁画が描かれており(註10)、調査後に保存施設を建設して年間4回の一般公開を通して社会教育に役立っている。



奈良・平安時代の遺跡は、律令体制のもとに行方郡家に擬定される泉廃寺跡(41)や軍団跡に擬定される植松廃寺跡(42)が新田川北川の丘陵裾部に所在している。両遺跡についてはこれまで発掘調査による成果はなかったが、泉廃寺跡については、平成6年度(1994)、県史跡内の従来焼け米が出土する地点から西側で、宅地新築に伴う試掘調査により、8～9世紀代の掘立柱建物跡と礎石建物跡が検出されると共に、掘立柱建物跡から礎石建物跡への変遷が確認された。平成7年度には県史跡の南東外側で、官衙的な色彩の強い一本柱柱列跡が2列発見され、平成8年度の第3次調査では掘立柱建物跡3棟、一本柱列2列などが調査され、第4次調査では堀込地業を伴う礎石建物跡とこれを囲む溝跡が検出され、なんらかの院を構成するものと推定される(註4)。今後の調査が期待される。また、両遺跡からは布目瓦が出土しており、供給源として泉廃寺は大甕の京塚沢瓦窯跡(43)が、植松廃寺は昭和59年(1984)に国士館大学により発掘調査が行なわれた入道迫瓦窯跡(44)(註11)が考えられている。この他、馬場の滝ノ原窯跡(45)では平安時代の須恵器窯跡3基が調査され、杯、長頸瓶などが出土している。

また、海岸部の金沢の丘陵の一角には大規模な製鉄遺跡(46)が所在している。平成元年度(1989)から5年度までに、財団法人福島県文化センター遺跡調査課により発掘調査が進められた結果、7世紀後半から9世紀の製鉄炉跡123基・木炭窯跡140基・竪穴住居跡121棟・鍛冶炉跡16基・掘立柱建物跡10棟など全国最大の調査数を誇り、内容においても古代の鉄生産に関する技術や社会的背景などを知る上で多大な成果が報告されている(註12)。

この時期になると、土師器や須恵器を出土する集落が増えるが調査例は少ない。変化としては新田川や太田川流域の河岸段丘の平坦面、あるいは自然堤防上など、これまで遺跡が少なかった平野部の微高地にも多くの遺跡が立地している。特に延喜式内社の押雄神社・冠嶺神社を中心とする北長野一帯、多珂神社・日祭神社を中心とする大甕一帯、太田川中流域の上太田一帯、桜井の河岸段丘面に多く所在しており、全体として、かつての野馬追原を取り囲むような立地構成をしている。大甕地区圃場整備事業に関連して平成2年(1990)に範囲確認調査が実施された米々沢の竹花A遺跡(47)では、奈良～平安時代の竪穴住居跡3棟が確認(註13)されており、平成4年(1992)には上北高平の高松B遺跡(48)でも奈良～平安時代と推定される竪穴住居跡2棟が試掘調査により発見されている。

中世の遺構として城館跡が挙げられるが、信田沢の内城のように現在では所在地不明のものや城館の構造が不明確のものも多い。その中でも、北泉の泉館跡(49)は、中世山城の典型的な形態をとどめている。館主は相馬氏の一族泉氏の館跡といわれ、その重要性から市指定史跡となっている。他にも、牛越城跡(50)・大甕七館の一つである明神館跡(51)・奥州下向の際、最初に相馬氏の拠点となった別所の館跡(52)などが比較的良好な中世山城の形態を残しながら所在しており、在地の領主の館跡も丘陵上や平野部の各地に点在しているが、発掘調査の手続きもなされないまま、部分的な破壊を受けているものも見受けられる。

中世の村落遺跡の把握は難しいが、米々沢の谷地畑遺跡(53)はその可能性が高い。平成2年に範囲確認調査が実施(註13)され、祥符元寶などの北宋銭が出土しており、近世にかけての遺跡と推定される。遺跡は奈良～平安時代の集落竹花A遺跡に隣接し、太田川北岸の自然堤防

上に立地している。

中世末の館跡である泉平館跡(54)は、相馬一族の長、岡田氏の居城とされ、短期間に使用された館であるが、ほ場整備事業に伴い、平成7年度に主郭から南側の発掘調査が実施された。小規模な畝堀を伴う堀跡と出入口が見つかった。

近世の遺構として、初頭期の慶長2年(1597)から同8年(1603)に相馬氏の居城として再整備されて使用された牛越城跡や中期初頭の寛文6年(1666)以降に築かれた野馬土手(55)及び出入口となる木戸跡がある。野馬土手は、野馬追に欠かせない野生馬の保護に力を尽くしてきた結果、増殖した馬が畑の作物を荒らしたり、放散しないように雲雀ヶ原扇状地を囲むように、東西約10km、南北約2.6kmに築かれたものである。大部分は土塁であるが、石垣としていた所もある。平成5年には、小高町が菖蒲沢で石垣の野馬土手の一部分を調査している。現在



図2 原町市内の主な遺跡

ではほとんどが消滅してしまっており、その保護が急がれるが、昭和62年（1987）の桜井野馬土手の範囲確認調査（註14）及び、平成5年の牛来、歴史民俗資料館予定地における調査では、土手の規模と内側に溝を掘っていた状況が確認されている。木戸跡は、多い時で30数ヶ所が設けられていたといわれているが、現在その姿をとどめているものは市指定史跡の羽山岳の木戸跡(56)一ヶ所だけとなっている。

近世後半から近代にかけては藩営の大規模なたたらとして馬場鉄山があり、周辺の小規模なたたらとしては財団法人福島県文化センター遺跡調査課により調査された馬場の五台山B遺跡(57)、片倉の羽山B遺跡(9)が阿武隈高地の山間部に遺されている（註1）。

また、近年、泉の正福寺跡(58)では火葬墓が調査され、泉の法幢寺跡(18)、北泉の地藏堂B遺跡(59)ではいわゆる鍋被りを含む土坑墓が調査され、近世の葬制・墓制に関する資料も蓄積されつつある。

註1 1990 寺島文隆他『原町火力発電所建設関連遺跡調査報告書Ⅰ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

註2 1994 武田耕平『県道相馬浪江線付替え工事関連遺跡発掘調査報告書畦原F遺跡』原町市教育委員会

註3 1983 長島雄一『赤沼遺跡試掘調査報告』原町市教育委員会

註4 1997 鈴木文雄他『原町市内遺跡発掘調査報告書2』原町市教育委員会

註5 1992 竹島國基『桜井』

註6 1996 辻 秀人他『桜井高見町A遺跡発掘調査報告書』東北学院大学文学部史学科辻ゼミナール・原町市教育委員会

註7 1985 玉川一郎他『国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書』原町市教育委員会

註8 1969 竹島國基他『原町市高見町1号墳・与太郎内1号墳調査報告』原町市教育委員会

註9 1965 竹島國基他『原町市高林古墳群調査報告書』原町市教育委員会

註10 1974 渡邊一雄他『羽山装飾横穴発掘調査概報』原町市教育委員会

註11 1984 戸田有二『考古学研究室発掘調査報告書福島県原町市・入道迫瓦窯跡』国土館大学文学部考古学研究室

註12 1991 寺島文隆他『原町火力発電所建設関連遺跡調査報告書Ⅱ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

1992 寺島文隆他『原町火力発電所建設関連遺跡調査報告書Ⅲ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

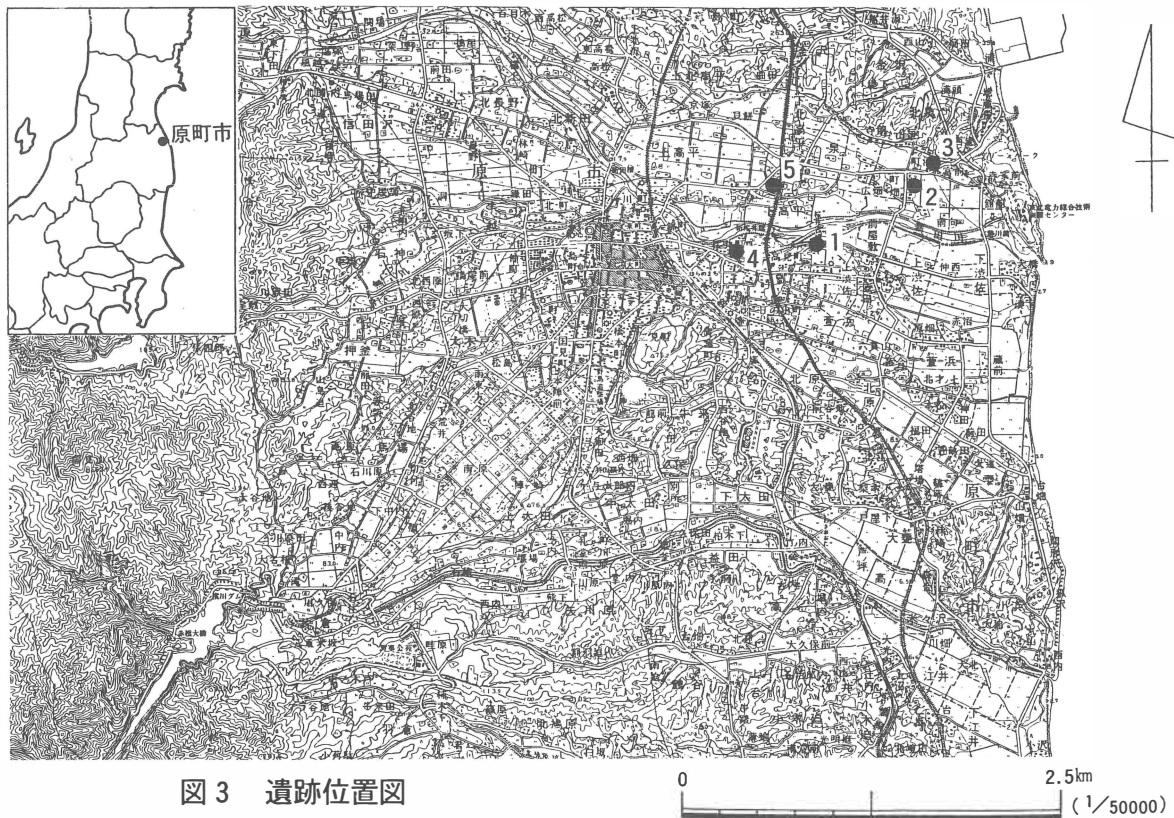
註13 1991 玉川一郎他『原町市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』原町市教育委員会

註14 1988 玉川一郎『野馬土手跡範囲確認調査報告書』原町市教育委員会

## 第2章 調査遺跡

原町市における近年の埋蔵文化財調査の傾向としては、ガットのウルグアイラウンド対策を盛り込んだ大型のは場整備事業関連の調査件数・調査面積が大半を占める状況にあるが、その他各種開発に関連する調査が増えつつある。

平成9年度の国・県補助事業にかかる調査遺跡は5遺跡である。上渋佐地区の桜井古墳群上渋佐支群(1)は、国指定史跡桜井古墳の保存整備事業にかかる調査である。泉地区の広畑遺跡(第2次調査)(2)及び泉廃寺跡(第6次調査)(3)は、県営は場整備事業にかかる遺跡の範囲確認調査である。桜井1丁目の桜井原畑遺跡(4)は、集合住宅建設にかかる調査である。下高平地区の谷中遺跡(5)は、店舗用地造成にかかる調査である。



# 第3章 試掘調査及び調査成果

## 第1節 桜井古墳群上渋佐支群 (遺跡番号20600044)

所在地 原町市上渋佐字原畑198・199・200・201-1

調査期間 平成9年4月10日から7月17日まで

対象面積 3,631 m<sup>2</sup>

調査面積 1,100 m<sup>2</sup> (試掘率30.3%)

事業内容 桜井古墳保存整備事業に伴う、保存整備の資料を得るための試掘調査

調査担当 鈴木文雄

### 遺跡概要

桜井古墳群は、新田川下流右岸の河岸段丘に沿って形成された古墳群である。この古墳群は、国指定史跡桜井古墳を中心とした古墳群で、桜井古墳西側の小支谷を挟んで東側の上渋佐支群と西側の高見町支群の二つの支群によって構成されている。これまでの調査から、桜井古墳は主軸長75m・高さ6mを測る前方後方墳で、築造年代はまだ明らかになっていないが、前方部は低く平面形はバチ形を呈する前方後方墳でも古式の形態から、4世紀後半に築造されたと考えられており、上渋佐支群では前期から後期の古墳が13基、高見町支群では後期の古墳が18基確認されている。しかし、畑の開墾・宅地化などによって消滅した古墳も多く、かつては数十基からなる古墳群であったと考えられる。

桜井古墳群とほぼ重複して、桜井遺跡群が存在する。桜井遺跡群は福島県浜通り地方における弥生時代中期の標式遺跡で、桜井式土器や石庖丁を多量に出土する。近年の発掘調査から、この遺跡群が弥生時代中期から古墳時代前期の大集落であることが明らかになりつつある。

近世の遺跡では、野馬土手がある。野馬土手は江戸時代に相馬中村藩が行った馬の保護政策のために放牧した馬が増殖し、付近の農作物を食い荒らすことになったため、被害を防ぐため、寛文6年(1666)に相馬忠胤によって高い土手と堀が築かれた。野馬土手は現在の市街地を中心に東西約8km・南北2.7kmの広大な範囲を取り囲んでいる。

### 調査の目的

今回の試掘調査は、桜井古墳保存整備事業に伴い、桜井古墳の西に隣接する上渋佐支群のうち2・3号墳の性格を明らかにする事を目的とした。

### 調査成果

遺構 弥生時代の竪穴住居跡2軒。1軒は調査区の西端で検出し、5m×5mの方形プランを呈する。2軒目は野馬土手の基底面で検出した。

古墳時代の古墳3基。2号墳は墳丘の直径20mの円墳で、幅3～4mの周溝が巡る。

埋葬施設は大規模な攪乱を受けており、ほとんど遺存していないが、割竹形木棺の身と蓋の間の目張りに使用したと考えられる白色粘土テープの痕跡から、割竹形木棺直葬と考えられる。3号墳は2号墳の西に位置する。地表面の観察からは、南北方向に主軸を持つ、前方後方墳あるいは前方後円墳のようにも見える。しかし、周溝状の幅1～3mの溝は墳丘？を囲むように半周しているが、巡り方が不整形で、古墳の形態は不明である。北側の墳丘？では盛り土がみられるが、南側の墳丘？は削出により成形されている。埋葬施設らしき掘り込みが北側の墳丘？から発見されたが、植林された杉があるため、確認できなかった。13号墳は2号墳の東側に位置する。墳丘や周溝は確認できず、埋葬施設のみ検出した。2号墳と同様に、白色粘土テープの痕跡から割竹形木棺直葬と考えられる。

時期不明の大溝1条。2号墳と3号墳の間に位置し、上面幅4m・底面幅2.6m・深さ1.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土していないが、古墳時代以前の構築と思われ、2号墳・3号墳の周溝を兼ねていた可能性がある。

近世の野馬土手1条。この野馬土手は「野馬追原の野馬土手」の北縁にあたり、新田川右岸の段丘崖に沿って続いている。規模は調査区内で長さ75m・幅6m・高さ2mで、野馬土手の南側（野馬追原の内側）に沿って深さ1.5mの堀が巡っている。

近世の土坑墓1基。3号墳の周溝を掘り込んでおり、規模は長さ1.5m・幅0.8mの長方形プランを呈し、深さ0.4m。埋葬形態は土葬で、屈葬されていた。

遺物 弥生時代中期（桜井式期）の土器・土製勾玉・土製紡垂車・土製算盤玉。弥生時代後期（十王台式期）の土器。

古墳時代中期の鉄剣の破片（2号墳埋葬施設の攪乱土内）。

近世の古銭（寛永通宝）・キセル・人骨

## 所 見

これまでの桜井古墳周辺の調査成果と今回の調査成果から、桜井古墳群上渋谷支群だけでも前方後方墳（桜井古墳）・方墳（7号墳）・円墳（2号墳他）・墳丘外埋葬施設（13号墳）と墳丘の形態は非常にバラエティーに富んだ様相を見せており、時期も古墳時代前期（桜井古墳・7号墳）・中期（2号墳）・後期（13号墳他）と長期にわたる。

また弥生時代の住居跡及び数多くの遺物が発見されたことから、弥生時代中期～後期の集落跡は高見町A遺跡から今回の調査範囲を含めた広範囲に及び、広義での桜井遺跡の東への広がりを追うことができた。

これらのことから、桜井古墳保存整備事業において、桜井古墳の国指定範囲の西に隣接するこの地域も含めた一体的な整備をはかる必要がある。今回の試掘調査で、この地区内の保存整備すべき遺構の種類・形態・配置などを把握することができた。

しかし、古墳の年代を決定づけるような良好な遺物を得るには不十分であった。また、遺跡一帯に杉が植林されており、埋葬施設をはじめ遺構の調査にかなりの制限があり、調査を十分できなかった部分が多い。特に3号墳は伐採後の再調査が必要である。



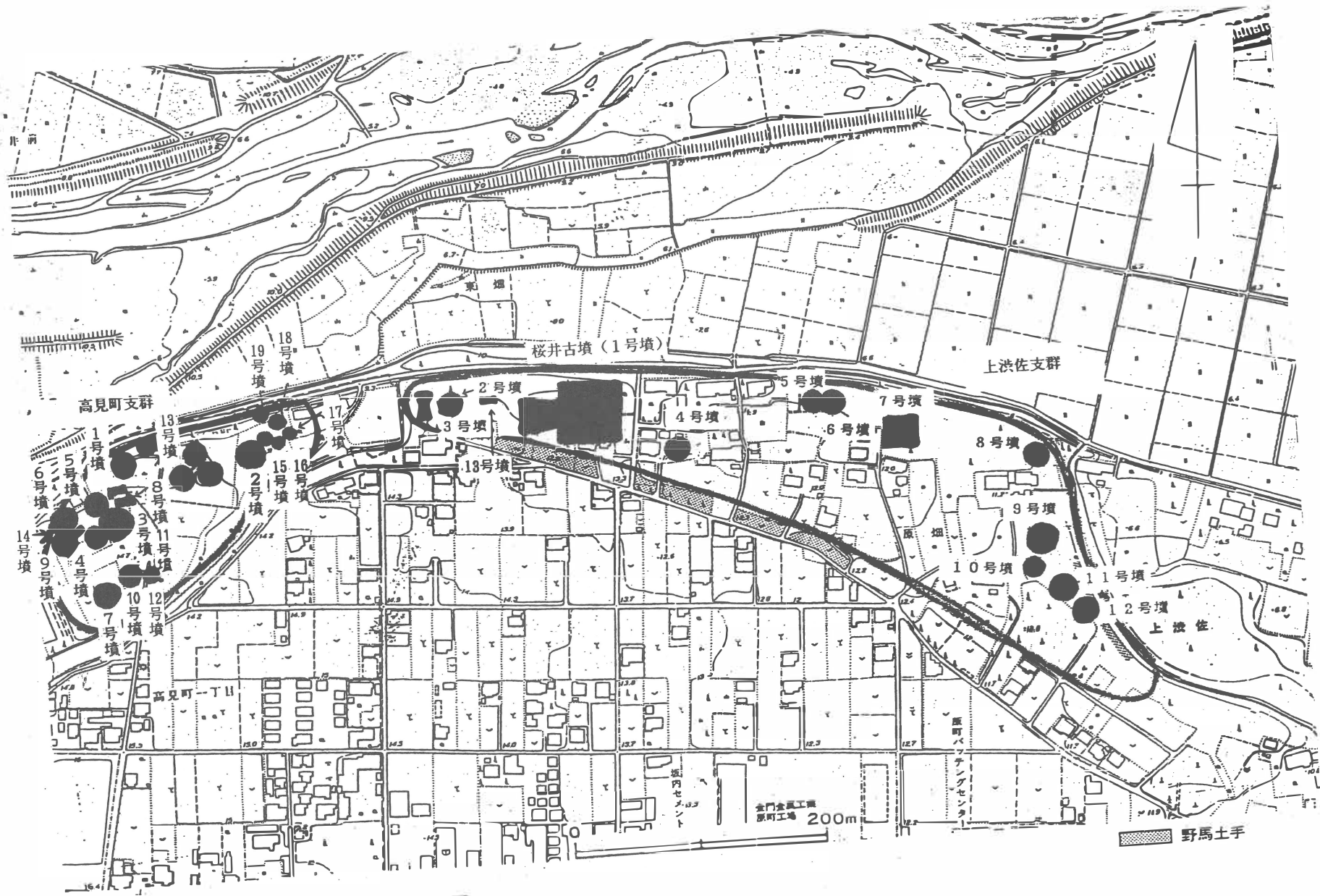


图4 桜井古墳群 古墳分布图



図5 桜井古墳之上波佐支群2・3号墳地形図



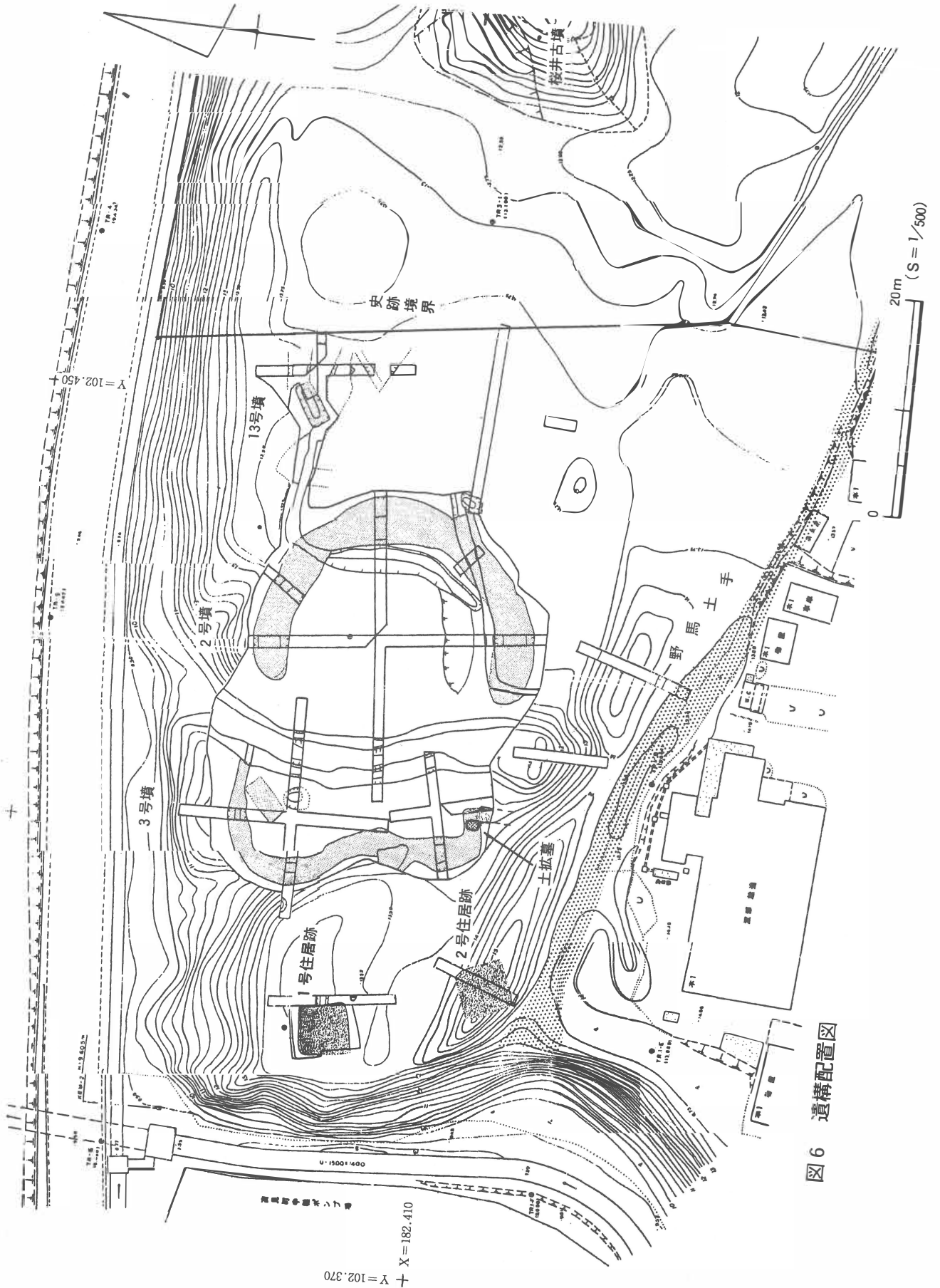


図6 遺構配置図

+ X=182.450

+ X=182.410  
+ Y=102.370



写真1 桜井古墳と2・3号墳(林の中)(北から)



写真2 弥生時代中期 住居跡(S11)(南から)



写真3 2号墳(南から)



写真4 2号墳埋葬施設(北から)



写真5 3号墳(南から)



写真6 13号墳埋葬施設(南から)



写真7 近世 野馬土手(南から)



写真8 近世 土拵墓(南から)

## 第2節 広畑遺跡（遺跡番号20600098）（第2次調査）

所在地 原町市泉字町塚越

調査期間 平成9年6月2日から平成9年9月1日まで

対象面積 52,800㎡

調査面積 2,137㎡（試掘率4%）

事業内容 県営ほ場整備事業に係る保存協議資料を得るための試掘調査

調査担当 堀 耕平

### 遺跡概要

遺跡は、新田川左岸の沖積地に立地する。古代の瓦（泉字塚越7在住、佐藤春巳氏蔵）や土師器が採集されたことから、奈良・平安時代の散布地として周知されている遺跡である。

### 調査概要

調査対象地に101か所のトレンチを設定した。トレンチは2×10mの大きさを基本に必要なに応じて拡張や新たな設定を行なった。掘り下げる深さは遺構を検出するまでまたは表土・盛り土を取り除いて古い土層を確認するところまでとした。表土除去は主に重機を用いて行ない、それ以下については人力で検出作業を行なった。

### 調査成果

遺構 古墳時代後期 竪穴住居跡2棟、柱列跡1列

平安時代 竪穴住居跡5棟、柱列跡5列、溝跡18条、ピット93基

遺物 古墳時代後期の土師器、鉄製鎌1丁

平安時代の土師器・墨書土師器・須恵器、瓦

101か所のトレンチのうち26か所で住居跡などの遺構が検出された。遺構が検出された場所は調査対象地の南半（A地区）と北東部分（B地区）である。北半の大部分は表土・盛り土の下が黒色泥質土で遺物はほとんどなく、遺構も検出されなかった。

A地区からは竪穴住居跡7棟、柱列跡6列、溝跡15条、ピット93基が、B地区からは溝跡3条（重複含む）が検出された。

出土遺物の大半が平安時代頃の土師器であるので遺構の時期もおおむね平安時代と推定されるが、第89号トレンチ検出の住居跡は出土遺物から古墳時代の可能性がある。また第73号トレンチでは墨書土師器杯が出土し、第82号トレンチからは、古代の平瓦が出土している。

### 所 見

遺跡は古墳時代から平安時代の集落遺跡で、古代行方郡衙に推定される県指定史跡泉麿寺跡からは約500mほどの距離にあり、これとの関連が想定される。

遺跡の範囲はA地区が23,300㎡、B地区が2,200㎡である。

遺跡の範囲について、掘削を伴う開発の場合には発掘調査が必要となる。周辺についても、開発にあたっては慎重な工事を要する。

広畑遺跡遺構検出トレンチ一覧表

番号	検出遺構	出土遺物	時代	地区
51	溝跡1	土師器	平安時代	A
52	溝跡1	土師器	〃	A
56	溝跡1、ピット1	土師器	〃	A
59	ピット3	土師器	〃	A
61	ピット4	土師器	〃	A
63	柱列跡2、溝跡1、ピット1	土師器	〃	A
64	柱列跡1、ピット2 4	土師器	〃	A
66	住居跡1、ピット1 0	土師器	〃	A
69	溝跡1、ピット3	土師器	〃	A
72	住居跡1、溝跡2、ピット1	土師器	〃	A
73	溝跡1	土師器（墨書土器）	〃	A
75	ピット1	土師器	〃	A
78	ピット2	土師器	〃	A
79	溝跡1、ピット8	土師器	〃	A
81	住居跡1、柱列跡1、ピット1	土師器	〃	A
82	溝跡1、ピット6	土師器、瓦	〃	A
83	住居跡1	土師器	〃	A
84	柱列跡1、ピット1 5	土師器	〃	A
89	住居跡2、柱列跡1、溝跡1、ピット1	土師器	古墳時代	A
90	溝跡1、ピット1	土師器	平安時代	A
91	溝跡2、ピット6	土師器	〃	A
92	住居跡1、ピット5	土師器	〃	A
94	溝跡1、ピット3	土師器	〃	A
20	溝跡1	土師器	〃	B
98	溝跡1	土師器	〃	B
99	溝跡1	土師器	〃	B
	住居跡7、柱列跡6、溝跡18、ピット93		古墳時代～平安時代	



図7 広畑遺跡トレンチ配置図

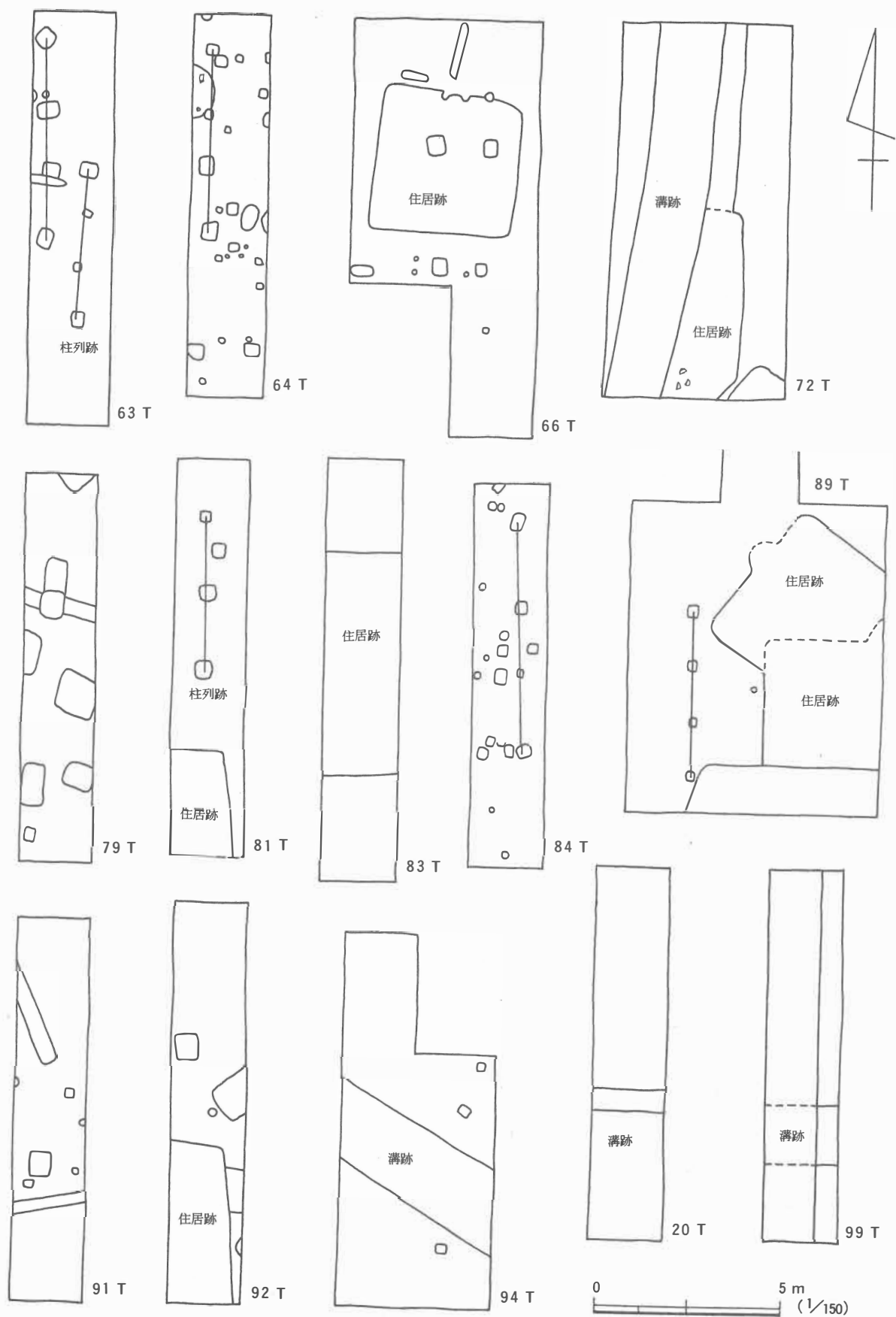


図8 広畑遺跡トレンチ図





写真9 遺跡近景 (南西から)



写真10 第63号トレンチ (南から)



写真11 第66号トレンチ (南から)

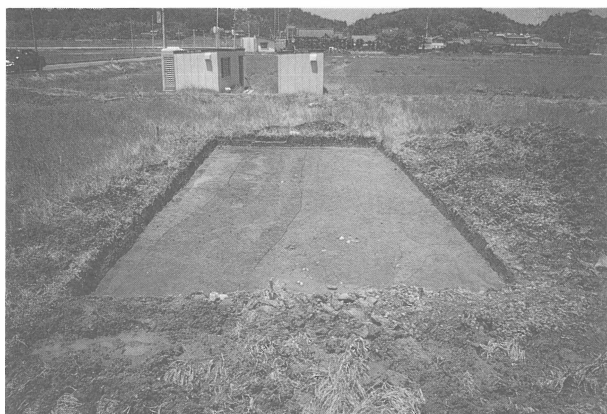


写真12 第72号トレンチ (南から)

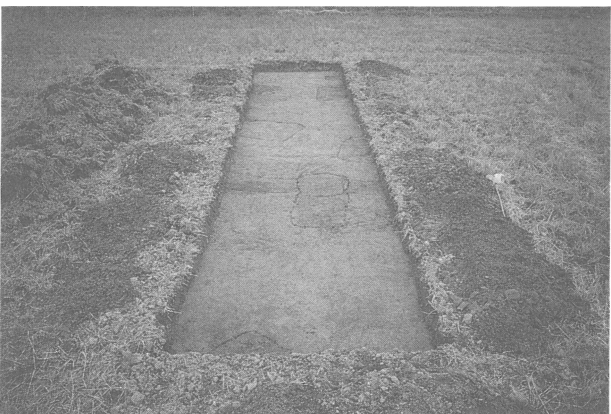


写真13 第79号トレンチ (北から)



写真14 第89号トレンチ (西から)



写真15 第94号トレンチ (南から)



写真16 作業風景 (北東から)

### 第3節 泉麿寺跡（遺跡番号20600097）（第6次調査）

所在地 原町市泉字町池・宮前・寺家前・町  
調査期間 平成9年7月18日から平成9年12月28日まで  
対象面積 24,000㎡  
調査面積 2,558㎡（試掘率10.7%）  
事業内容 県営ほ場整備事業に係る保存協議資料を得るための試掘調査  
調査担当 鈴木文雄・堀 耕平

#### 遺跡概要

遺跡は、新田川左岸の沖積地から河岸段丘面に立地する。古代の瓦や炭化米が出土し、建物跡の礎石が点在することから、古代の寺院跡として、昭和30年（1955）に福島県の史跡指定を受けた。近年では、古代行方郡の郡家跡との見方が有力である。遺跡の推定面積は約120,000㎡、そのうち史跡指定面積は約47,000㎡である。昭和40年（1965）に、県立原町高等学校の郷土史研究部が礎石等の分布調査を行なった以外は、遺跡の範囲や内容についての発掘調査はほとんど実施されていなかった。平成6年度から県営ほ場整備事業に関連して、主に史跡指定範囲の周囲について試掘調査を行い、平成7年度には、官衙的な様相を呈する遺構が検出された。保存協議の結果、ほ場整備事業に伴い改修する武須川の計画路線を変更し、重要な部分を保存することとなった。平成8年度には県史跡のうち西側の部分の試掘調査を実施し、掘立柱建物跡2棟、掘込地業1基、溝跡6条を検出した。掘込地業は、礎石建物跡のものと推測され、これを囲むように検出された溝跡は、正倉院の区画施設と考えている。

#### 調査概要

調査対象区域に2×10mの大きさを基本にトレンチを設定し、状況に応じてトレンチの拡張や新たなトレンチの設定を行なった。表土除去は重機で行ない、その後人手で遺構検出を行なった。調査は遺構検出までを原則としたが、遺構完掘まで行なったトレンチもある。

#### 調査成果

遺構 奈良・平安時代の掘立柱建物跡3棟、溝跡31条

遺物 奈良・平安時代の土師器、須恵器、瓦、漆塗り椀、柱、礎板、木筒状木製品

#### 所 見

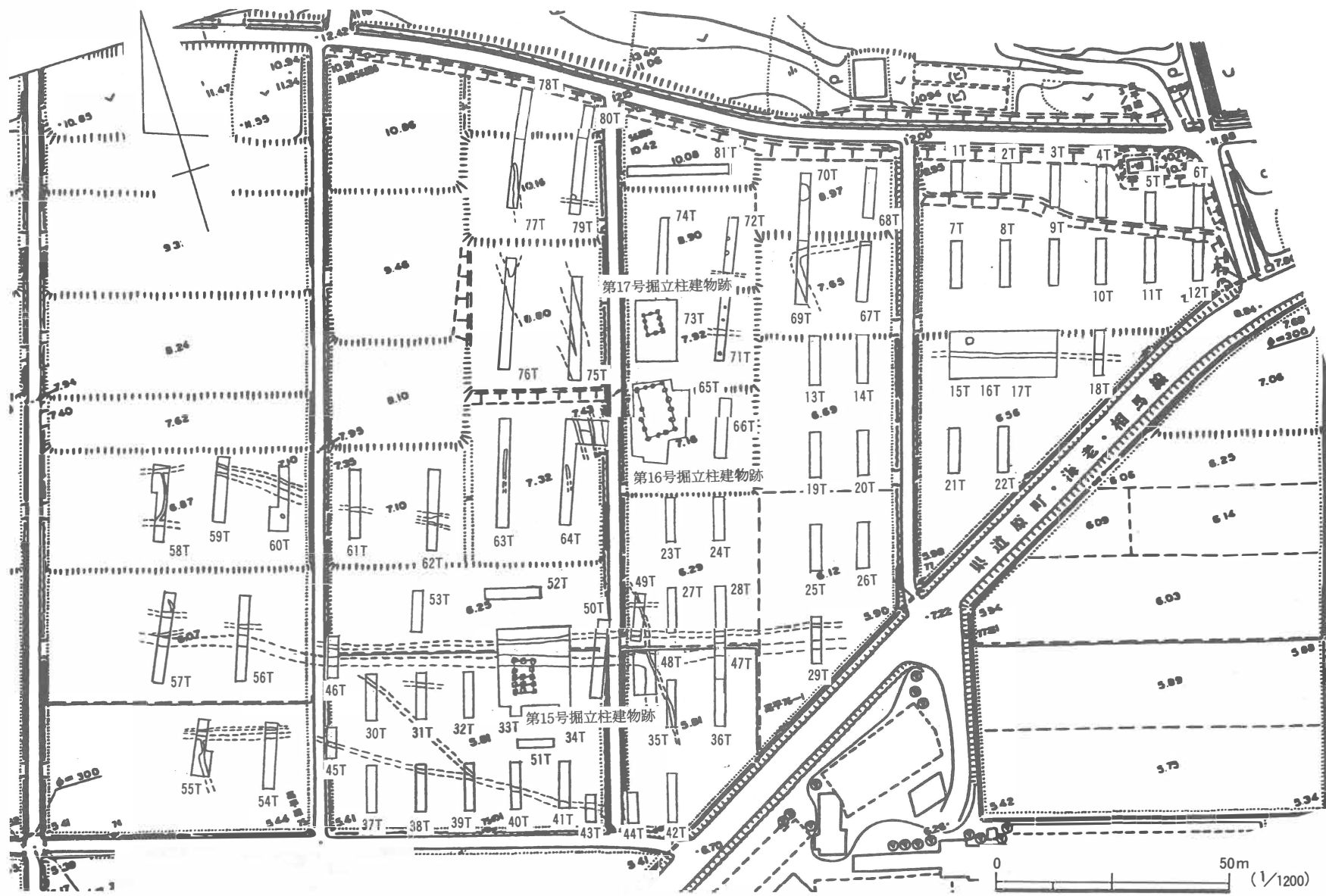
今回の調査区は泉麿寺跡推定範囲の北西部分にあたる。平成6年度には今回の調査区の南側を試掘調査しており、遺構・遺物は検出されなかったことから、今回の試掘調査でも遺構・遺物の検出はそれほど予想していなかった。

しかし、今回、掘立柱建物跡、溝跡が広く検出されたことから、今回の調査区全体が遺跡の範囲であり、広がりにはさらに西側及び北側に延びることが確認された。特に第15号掘立柱建物跡の検出は、周囲にさらなる存在を想定させるものである。

開発にあたっては、工法対応が望ましいが、困難な場合には発掘調査が必要である。



図9 泉庵寺跡トレンチ・遺構配置図



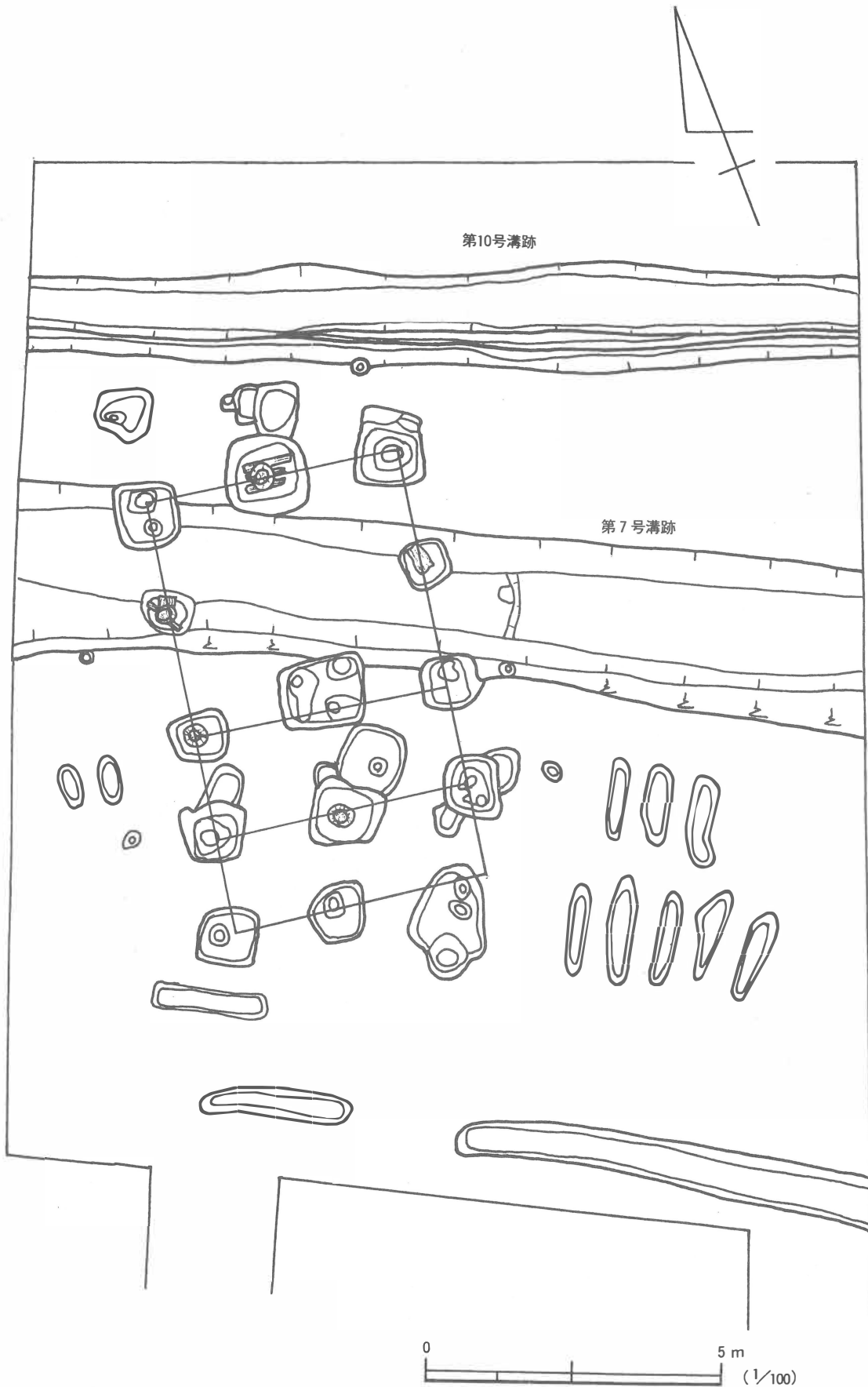


図10 第15号掘立柱建物跡



写真17 遺跡近景（北東から）



写真18 掘方内柱出土状況

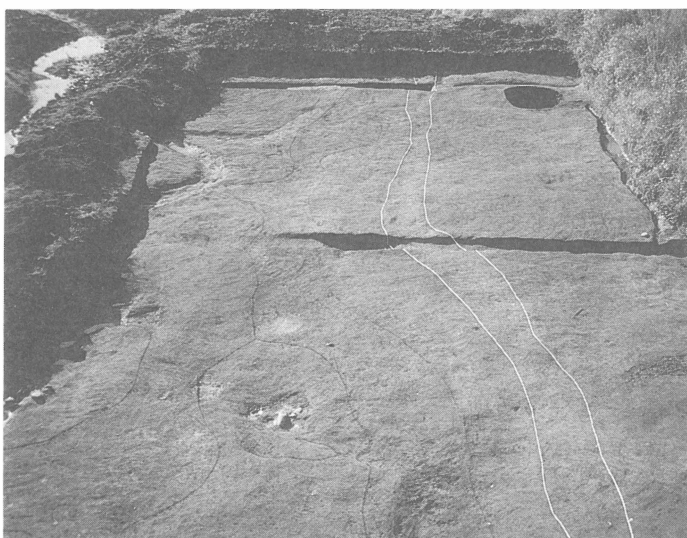


写真19 第15・16号トレンチ（東から）



写真20 掘方内柱出土状況



写真21 第15号掘立柱建物跡（東から）



写真22 掘方内柱出土状況



写真23 遺跡近景（南西より）



写真24 第48号トレンチ（北から）



写真25 第58号トレンチ（南から）



写真26 第62号トレンチ（南から）



写真27 第78号トレンチ（南から）



写真28 第16号掘立柱建物跡（北から）



## 第4節 桜井原畑遺跡 (遺跡番号20600041)

所在地 原町市桜井二丁目  
 調査期間 平成9年11月10日から11月19日まで  
 対象面積 1,094㎡  
 調査面積 99㎡ (試掘率9%)  
 事業種別 集合住宅建築に係る保存協議資料を得るための試掘調査  
 調査担当 堀 耕平

### 遺跡概要

遺跡は、原町市北部を東流する新田川によって形成された右岸の河岸段丘上に立地する。標高は15mである。現況は、宅地・畑・荒地になっている。遺跡からは、縄文土器(晩期)・石斧・石剣・石鏃・土偶・土垂などが採集されており、縄文時代晩期の遺跡として周知されている。面積は約30,000㎡と推定されている。

また、遺跡の北端、段丘崖上に沿って江戸時代に構築された野馬土手が走っており、今回の調査区付近には「桜井木戸」があったと伝えられている。崖下には江戸時代末期から明治時代にかけて掘られた萱浜用水(桜井江筋)の切り通し(隧道)が遺存している。

### 調査概要

調査区の草刈り後、崖際に崖に沿って低い土手状の高まりがあることから、土手に内堀の有無確認のため、これに直角に幅2mのトレンチを設定した。また、調査区全体について、遺構確認のためのトレンチを設定した。表土(20cm)除去は重機で行ない、遺構検出は人手で行なった。

### 調査成果

遺構 江戸時代?の土手1条、溝跡1条  
 遺物 縄文時代晩期の土器  
 弥生時代中期の土器  
 平安時代の土師器

### 所見

調査の結果、調査区北端に土手とその北側に溝跡が検出された。内堀(土手の南側)は検出されなかった。調査区の南側に住んでいる鈴木氏の話によると、鈴木氏宅の敷地に野馬土手の桜井木戸守があったと伝えられていることから、今回確認した土手は野馬土手に関連する遺構の可能性はある。また、土手北側の溝跡は土手に沿っていると推定できることから、今回の土手と一体の遺構と考えられる。遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器が数片出土したが、土手以外の遺構は検出されなかった。

開発にあたっては、土手から北側については工法対応が望ましいが、困難な場合には発掘調査が必要である。その他の部分については慎重な工事を要する。

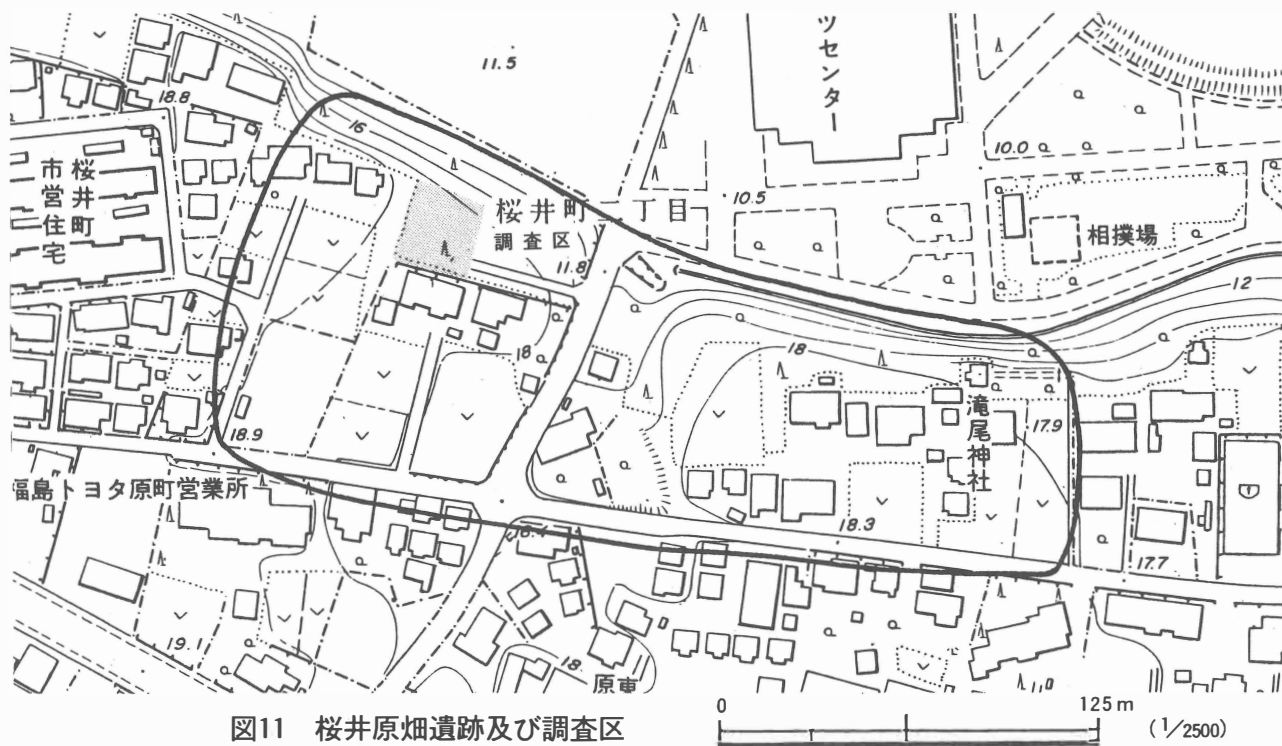


図11 桜井原畑遺跡及び調査区

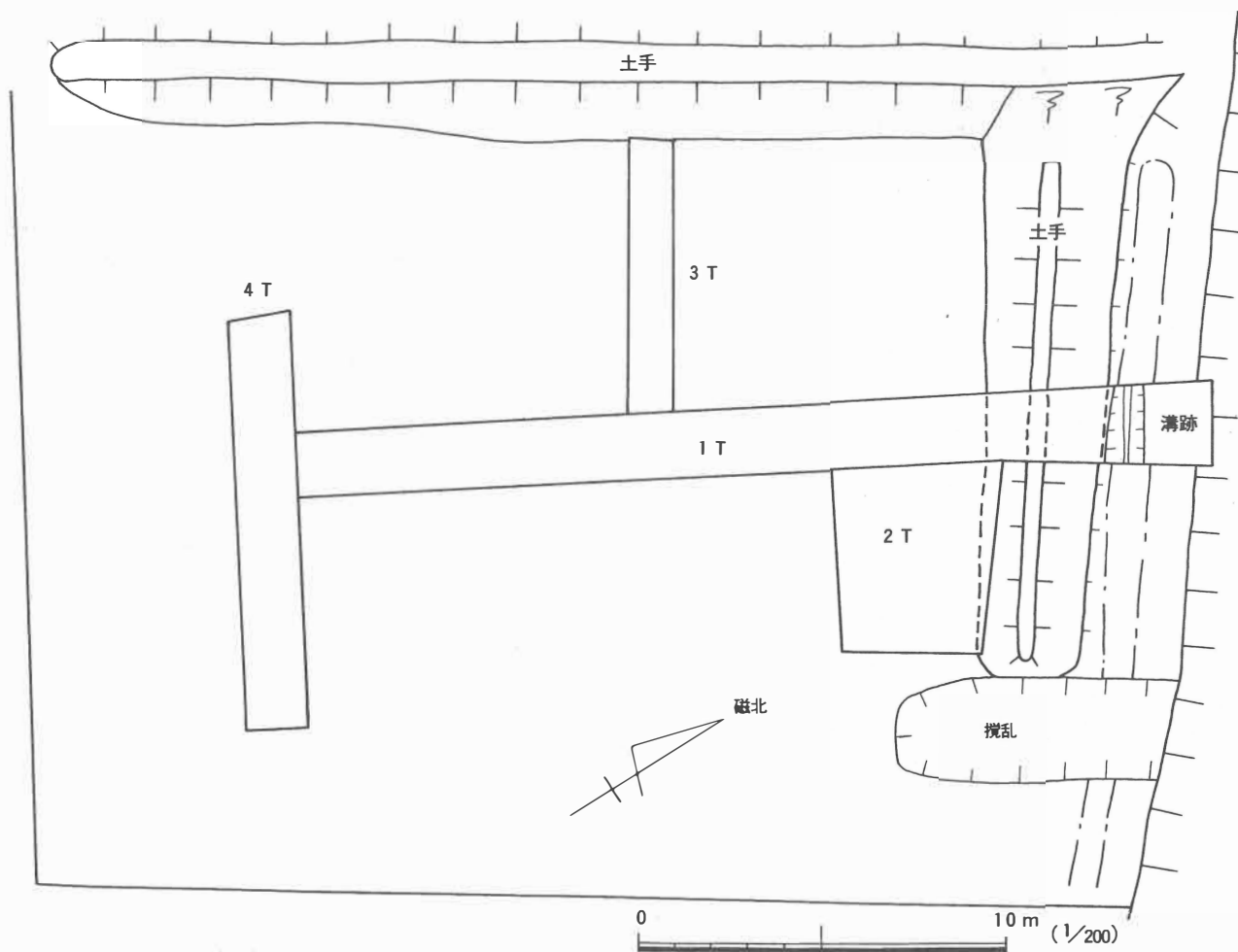


図12 桜井原畑遺跡トレンチ配置図



写真29 遺跡近景



写真30 第1号トレンチ (南から)



写真31 第2号トレンチ (西から)



写真32 第3号トレンチ (東から)



写真33 第4号トレンチ (東から)



写真34 土手 (東から)

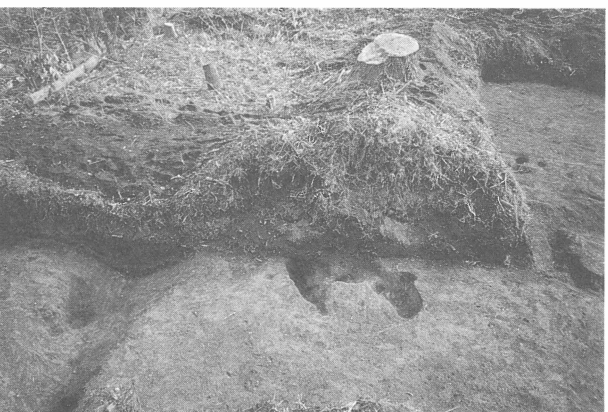


写真35 土手断面及び溝跡 (西から)



写真36 調査区全景 (北東から)

## 第5節 谷中遺跡（遺跡番号20600035）

所在地 原町市下高平字堂後、御屋敷

調査期間 平成9年11月25日から12月27日まで

対象面積 26,743㎡

調査面積 1,198㎡（試掘率4.5%）

事業種別 店舗敷地造成工事に係る保存協議資料を得るための試掘調査

調査担当 堀 耕平

### 遺跡概要

遺跡は、原町市北部を東流する新田川右岸の沖積地に立地する。標高は9～10mである。現況は、宅地・水田・畑になっている。遺跡からは、打製石鍬・土師器が採集された記録があり、弥生時代、平安時代の散布地として周知されている。地元の俗称に寂光院とも言われる。

面積は約11,000㎡と推定されている。

### 調査概要

調査区全体に4×6mの大きさを基本として、任意の場所にトレンチ60か所を設定した。表土除去を重機で行なった後、少しずつ重機で掘り下げ、黄褐色の地山か湧水のある深さで止めた。土層は、黒色あるいは黒褐色の粘質土で、深さが60～140cmに達しても地山が確認できないトレンチがほとんどであった。

### 調査成果

遺構 検出されなかった。

遺物 縄文時代の土器

古墳時代、奈良・平安時代の土師器

近代・現代の陶磁器

### 所 見

調査の結果、遺構は検出されず、遺物は数片出土したのみであった。遺跡の立地する場所は湿地のような土地であることから、住居跡のような遺構は占地しにくい場所と考えられる。周辺で遺構の存在が推定されるのは、現在宅地があるような微高地と思われる。

開発にあたっては慎重な工事を要する。





図13 谷中遺跡トレンチ配置図



写真37 遺跡近景 (西から)



写真38 第17号トレンチ (南から)



写真39 第34号トレンチ (南から)

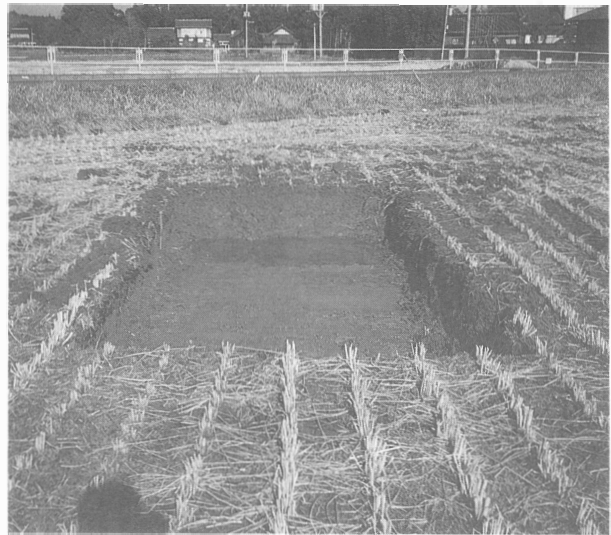


写真40 第38号トレンチ (南から)



写真41 第47号トレンチ (南から)



写真42 作業風景 (西から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	はらまちしないいせきはくつちょうさほうこくしょさん						
書名	原町市内遺跡発掘調査 報告書3						
副書名	平成9年度試掘調査 桜井 古墳群 広畑遺跡 (第2次調査)・泉廃寺跡 (第6次調査)・桜井 原畑遺跡・谷中遺跡						
シリーズ名	原町市埋蔵文化財調査 報告書						
シリーズ番号	第17集						
編著者名	鈴木文雄・堀 耕平・荒 淑人						
編集機関	福島県 原町市教育委員会生涯学習部文化課						
所在地	〒975-0012 福島県 原町市三島町2丁目45番地 Tel0244(24)5284						
発行年月日	西暦 1998年(平成10) 3月31日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査原因
さくらいこふんぐん 桜井 古墳群	はらま ちゆみしぶさあ ざはらはた 原町市上渋佐字 原畑	07206 00044	37° 38' 15"	140° 59' 45"	19970410 ～ 19970717	1100	保存整備 事業
ひろはたいせき 広畑遺跡	はらま しあず りざかこし 原町市泉字 鬮	07206 00098	37° 38' 40"	141° 00' 30"	19970602 ～ 19970901	2137	県 営ほ場 整備事業
いずみはいじあと 泉廃寺跡	はらま ちげあざま しあ 原町市泉字 町池	07206 00097	37° 38' 50"	141° 00' 40"	19970718 ～ 19971228	2558	県 営ほ場 整備事業
さくらいはらはいせき 桜井 原畑遺跡	はらま ちしさいんちようめ 原町市桜井二丁目	07206 00041	37° 38' 10"	140° 59' 00"	19971110 ～ 19971119	99	集合住宅 建築
やなか いせき 谷中遺跡	はらま ししもたかひらあ ざお やしき 原町市下高平字御屋敷	07206 00035	37° 38' 40"	140° 59' 10"	19971125 ～ 19971227	1198	店舗用地 造成
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特記事項	
桜井 古墳群	古 墳	弥生・古墳・近世	住居跡2・古墳3・野馬土手1・土坑墓		弥生土器・鉄剣・古銭		
広畑遺跡	集 落 跡	古墳・平安	住居跡7・柱列跡6		墨書土器・鉄製鎌・瓦		
泉廃寺跡	官 衙 跡	奈良・平安	掘立柱建物跡3・溝跡31		土師器・須恵器・瓦・柱・礎板		
桜井原畑遺跡	散 布 地	縄文・弥生・近世	野馬土手1・溝跡1		縄文土器・弥生土器・土師器		
谷中遺跡	散 布 地	古墳・奈良・平安			土師器		

原町市埋蔵文化財調査報告書第17集  
原町市内遺跡発掘調査報告書 3

平成10年 3 月31日発行

発行 福島県原町市教育委員会  
〒975-0012  
福島県原町市本町二丁目27番地

印刷 有限会社ライト印刷  
〒975-0073  
福島県原町市北新田字信田370-1